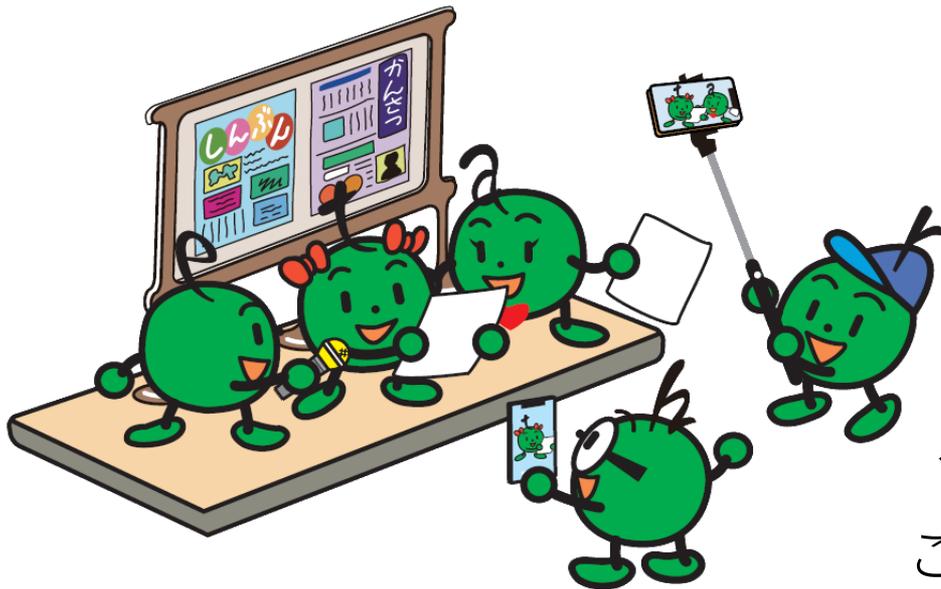


2021年度 こどもエコクラブ

# サポーターアンケート結果報告書

---



公益財団法人日本環境協会  
こどもエコクラブ全国事務局

# 調査のあらまし

---

## 【調査目的】

こどもエコクラブのサポーター及び活動の実態を把握し、こどもエコクラブが持続可能な社会づくりの担い手育成に対してどのように貢献しているか、またどのような課題を抱えているかを明らかにするとともに、調査結果を関係者と共有し、今後の事業展開の参考としていただきます。

## 【実施概要】

### 1. 対象

2021年度登録クラブ(1,683クラブ、2022年1月末時点)のうち

①メールアドレスが登録されている 1,394クラブ

②FAX番号が登録されている 24クラブ

**合計1,418クラブ**

### 2. 実施期間

2022年2月3日～4月18日(※当初の3月18日締切を延長)

### 3. 実施方法

・アンケート回答用ウェブページを作成してメールまたはFAXでURLを案内して回答を依頼

・インターネットが使用できないクラブにはFAXでの回答を依頼

※3月22日にメールで再度回答をお願いしました

### 4. 有効回答数

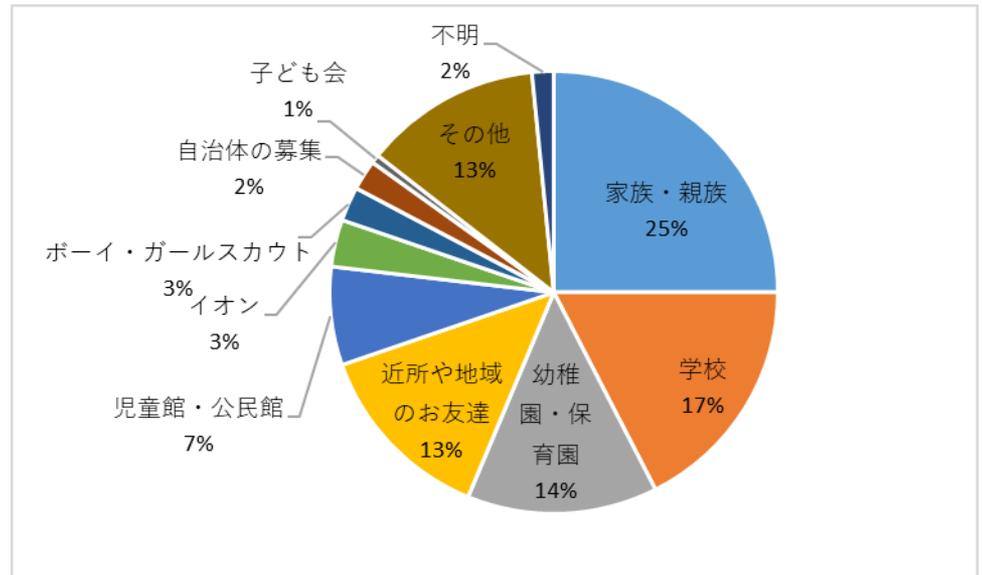
①ウェブサイトからの回答:317件

②FAX等での回答:3件

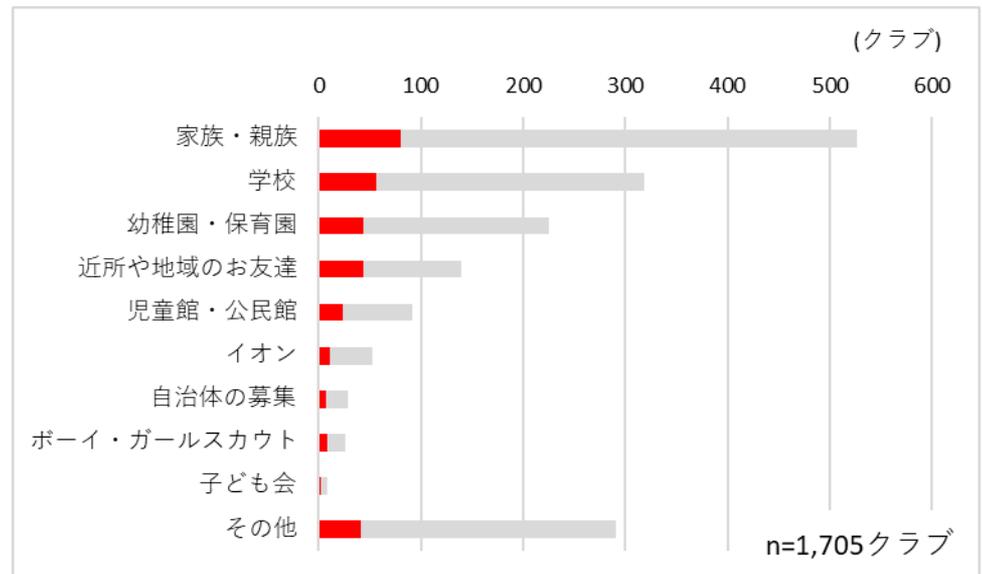
**合計:320件(回答率22.6%)**

# 多様な設立形態のクラブから回答をいただきました

- 右の図は、アンケートに回答をいただいたクラブの設立形態を表します。
- 親子で結成したクラブ、学校で取り組むクラブ、近所のお友達が集まったクラブなど実に多彩な設置形態のクラブから回答を得ることができました。
- このように多様な集団に所属する子どもたちが「こどもエコクラブ」の名のもと、全国で活動しています。

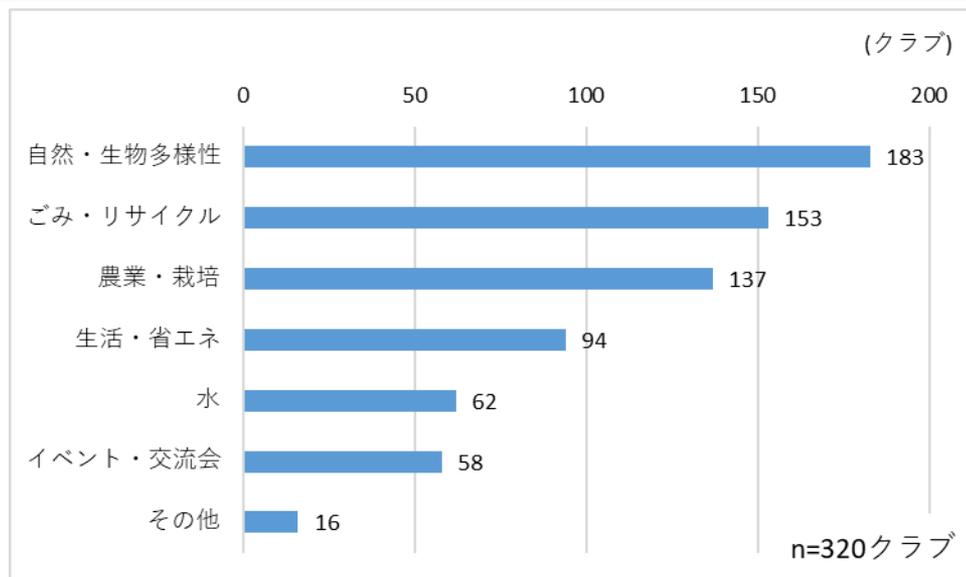


- 右の図は、こどもエコクラブ全国事務局が管理するデータベースを基にして2022年3月末時点で登録があったこどもエコクラブ1680団体を形態別に表したものです。
- クラブの設置形態別に、回答をいただいた数を赤く色づけしています。
- 回答の比率で見ると「近所や地域のお友達」が結成したクラブがやや高いようです。

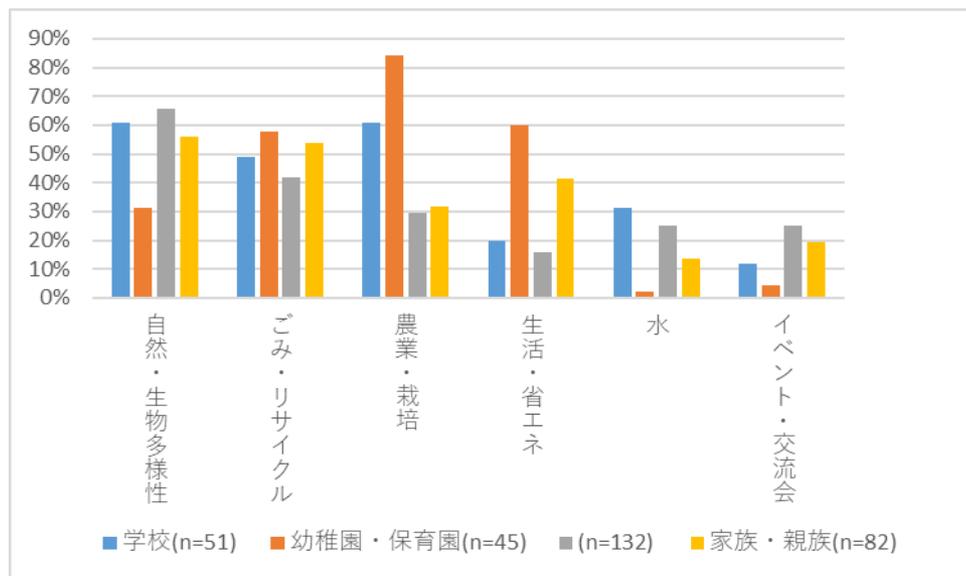


## 多様な活動分野・参加人数（1）

- 右上の図は主な活動分野を表します。選択肢から3つまで選んでいただきました。
- 自然や生き物をテーマとした活動が最も多く、次いで「ごみ・リサイクル」、「農業・栽培」、「生活・省エネ」の順となりました。

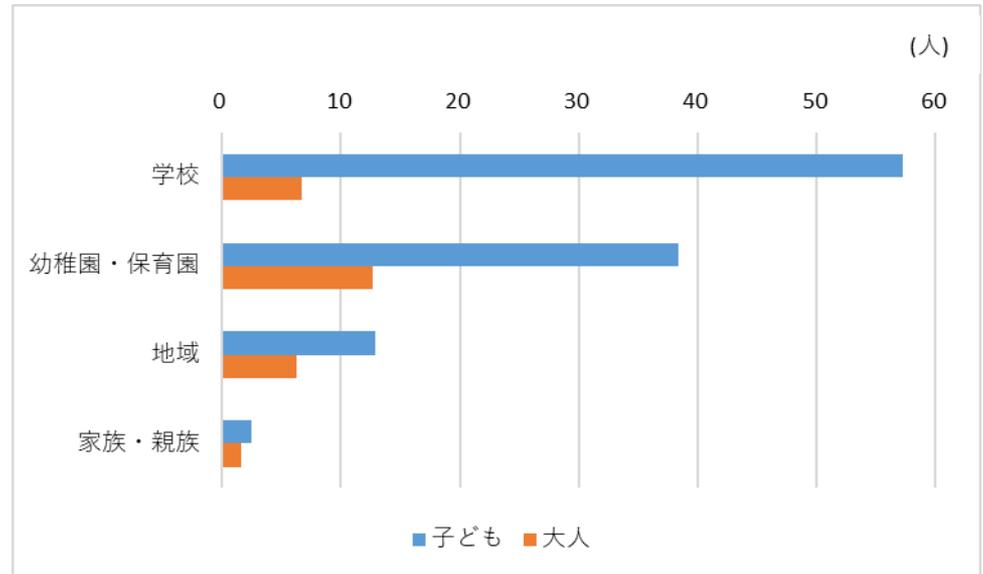


- 右の図は各活動分野を実施したクラブの割合を形態別に算出したものです。「学校」、「幼稚園・保育園」、「家族・親族」以外の設立形態を、「地域」としてまとめました(以下同じ)。
- 幼稚園・保育園のクラブでは、園庭等で実施できる「農業・栽培」の割合がかなり高くなる一方、安全管理上のリスクが高いと思われる水関係の活動が少なくなっています。



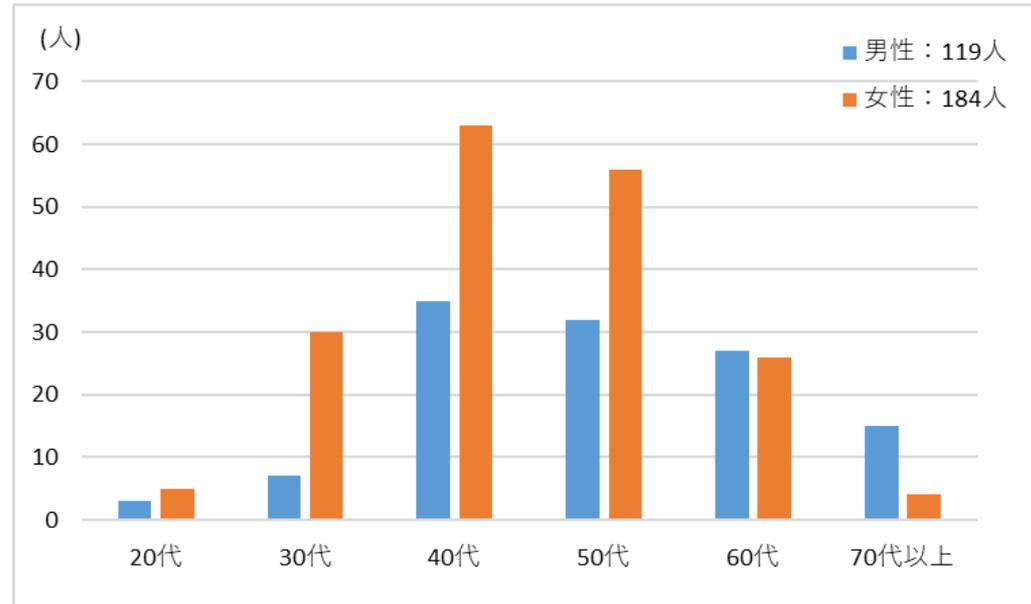
## 多様な活動分野・参加人数（2）

- 右の図は1回あたりの平均参加人数を表します。
- 学校、幼稚園・保育園のクラブでは、当然のことながら参加人数が多くなっています。幼稚園・保育園では子どもの参加人数に対する大人の数が学校よりも多く、活動の際に大人が目が多くあることが重要だと考えられます。

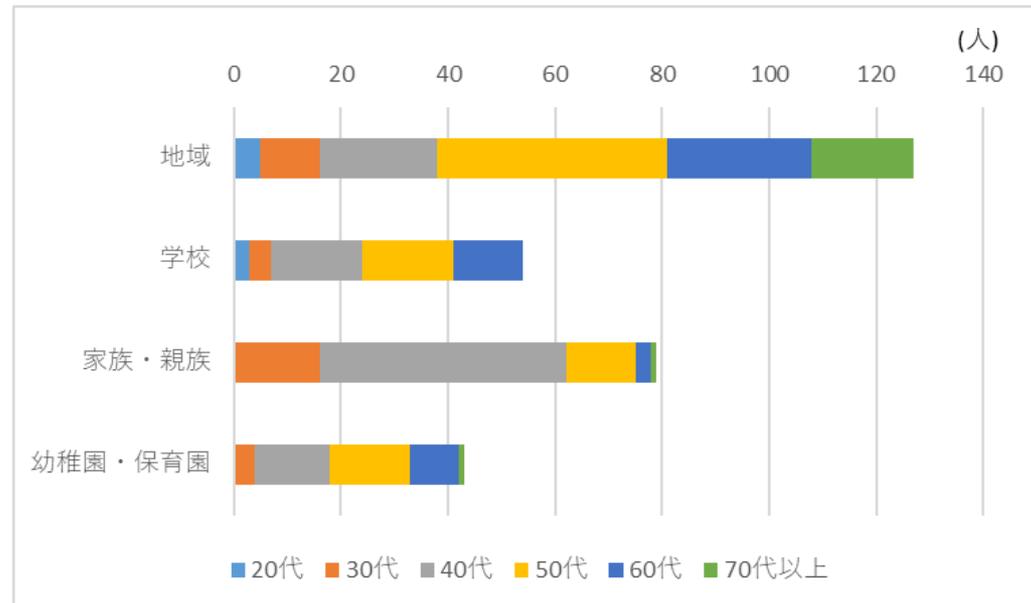


# 代表サポーターは多様性に富んでいます (1) 年代

- 右の図は、代表サポーターの年代と性別を表しています。幅広い年代がありますが、中でも**40～50代の女性が多い**ことが特徴です。「働き盛り年代」が地域の環境問題に携わっていただいていることが本事業の大きな強みです。
- 「家族」のクラブは、母親が代表サポーターとなるケースが多く、子どもの成長に影響力が強い母親が携わることも強みです。
- **10～20代の若者世代は、代表サポーターではなく活動をサポートするスタッフとして関わるケースが多いとみられます。**

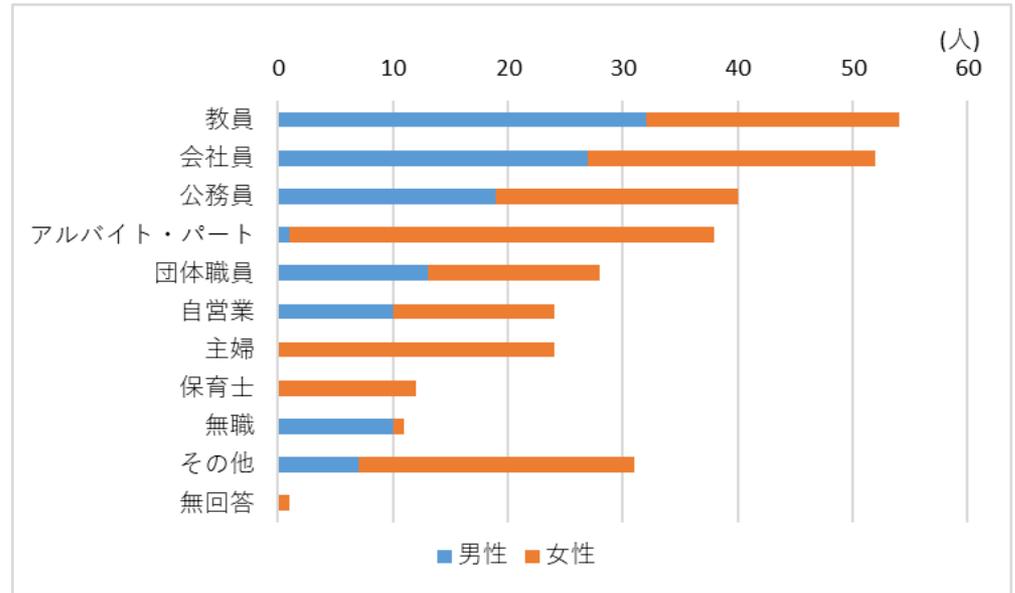


- 右の図は、クラブの設立形態別の代表サポーターの年代を表します。
- 「家族」は幼児～小学生が多いことから、代表サポーターは**40代が多くなります。**
- 「学校」で**60代が代表サポーターを務めているクラブが一定数あり、教職員以外の方が関わる場合もあることがわかります。**
- 「地域」は高齢の方が目立ちますが、若い年齢層のサポーターもおり、幅広い年代層がクラブを支えていることがわかります。

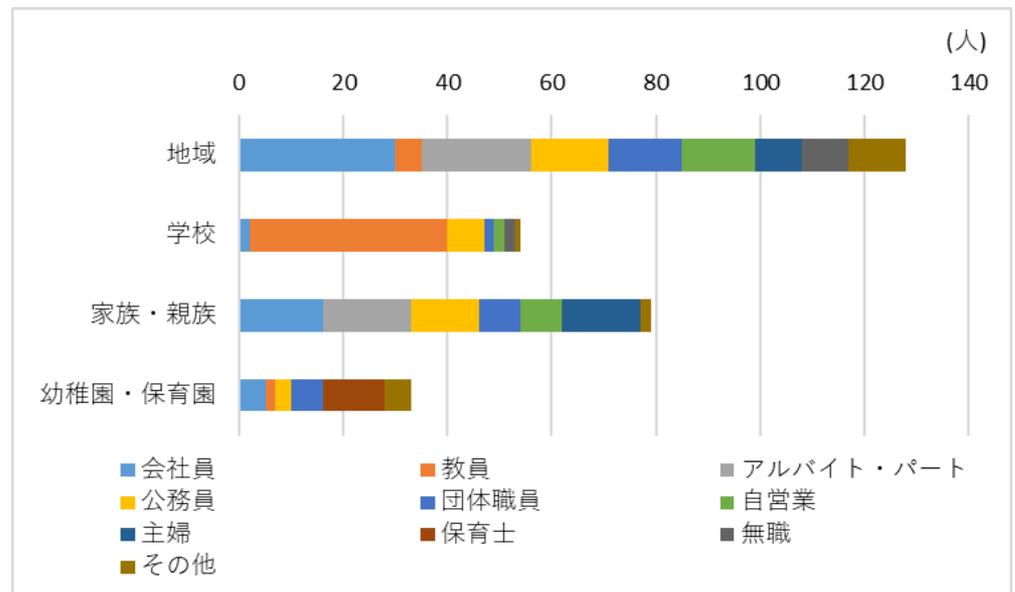


## 代表サポーターは多様性に富んでいます (2) 職業

- 右の図は、代表サポーターの職業と性別を表します。様々な職業の方が子どもたちの環境活動をサポートしてくださっていることがわかりました。
- セクターを越えて地域の環境問題に携わっていただいている方々とのネットワークを築いていることが本事業の大きな強みです。この強みを活かして地域課題解決のためにマルチ・ステークホルダーによる協働をさらに強化することが今後の課題です。

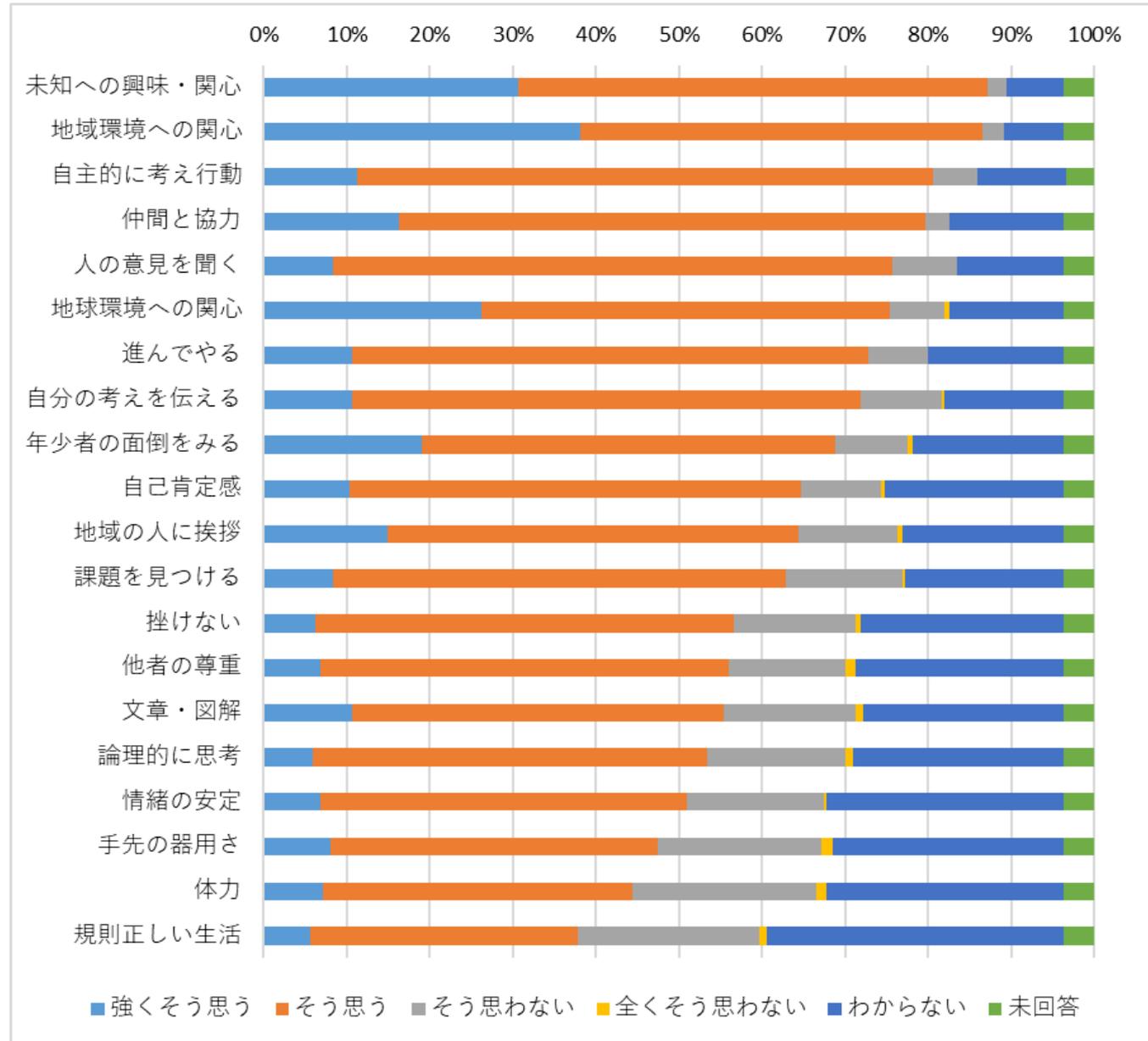


- 右の図は、クラブの設立形態別に代表サポーターの職業を表します。
- 「学校」は教員が多いのは当然ですが、教員以外の方も学校での活動をサポートしていただいていることがわかります。
- 「地域」のクラブは、非常に幅広い職業の方が関わっています。



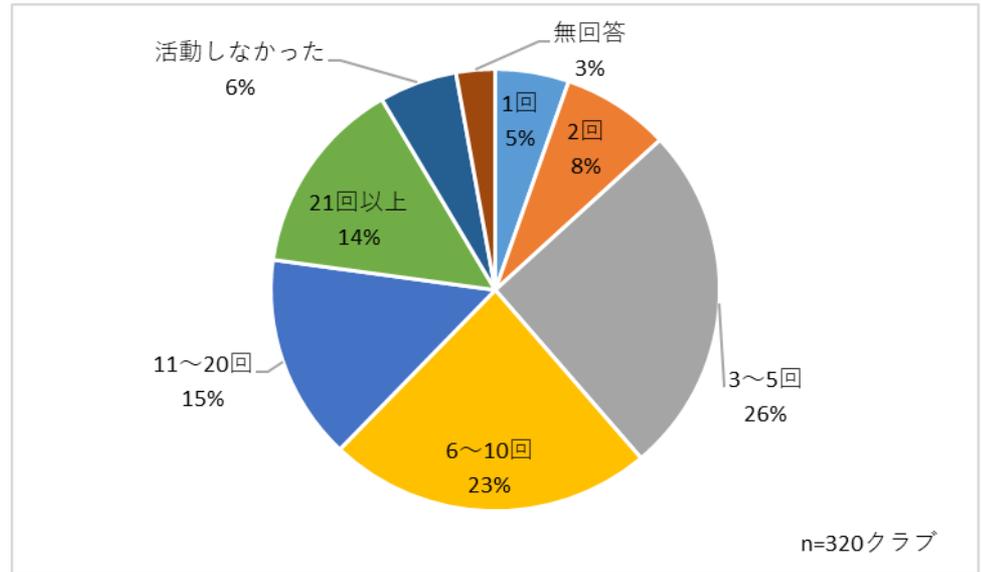
# こどもエコクラブはどのように子どもの成長を促しているか

- 右の図は、代表サポーターの方が、こどもエコクラブの活動によって子どもがどのように成長していると感じているかを表します。
- 20の項目ごとに「強く思う」「そう思う」「そう思わない」「全くそう思わない」「わからない」の5つの選択肢の中から回答していただきました。
- こどもエコクラブ活動によって「未知への興味・関心」「地域環境への関心」が高まり、「仲間と協力」し「自主的に考え行動」できるようになるとの回答が多くありました。

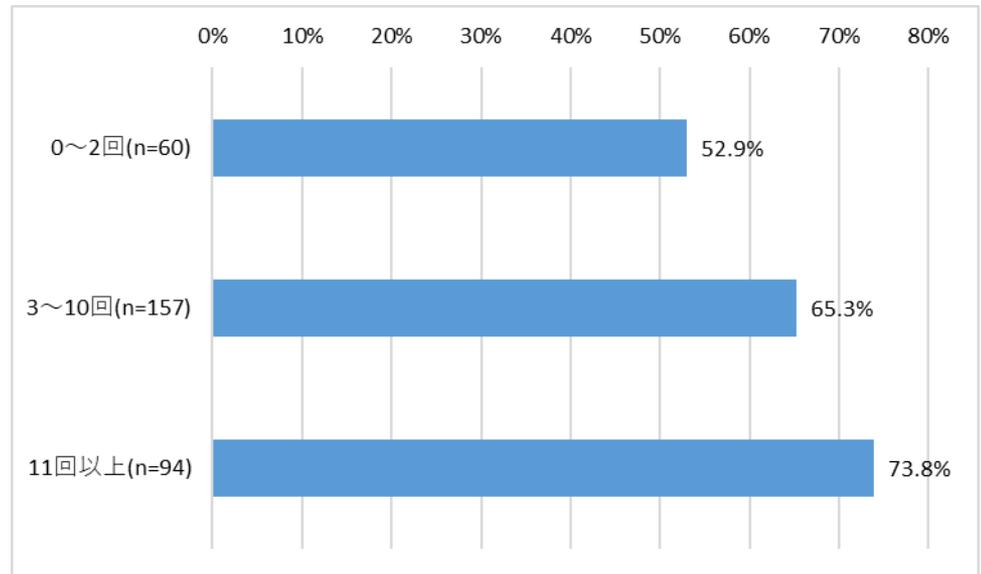


# 活動回数と子どもの成長

- 右の図は、一年間にクラブが行った活動の回数を表しています。
- 活動しなかった(できなかった)クラブの割合が前年に比べて大きく減少しました。コロナ下で活動がままならなかった状況からは徐々に抜け出しつつあるようです。
- 3割近くのクラブが毎月1回以上活動しており、継続して繰り返し活動することにより子どもたちの成長を促すこどもエコクラブのコンセプトが浸透していることがうかがえます。

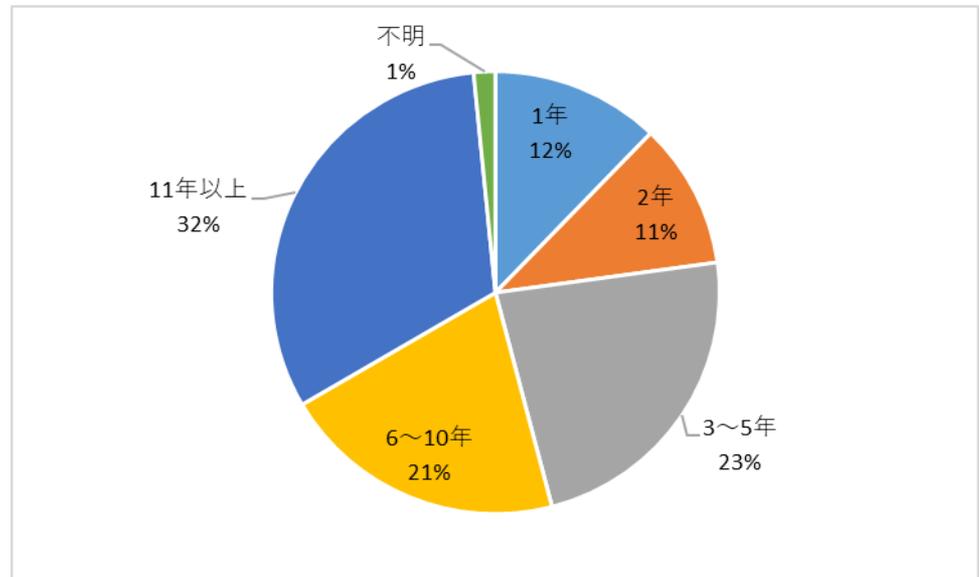


- 右の図は、子どもの成長を把握する20の指標で肯定的な回答(=「強くそう思う」「そう思う」)数を数え、年間活動回数を3段階区分にしてその割合を表したものです。
- 活動回数が多いクラブほど子どもの成長を感じていることを表しています。
- 繰り返し継続的に活動するクラブをさらに増やすよう取り組みを強めることが課題です。

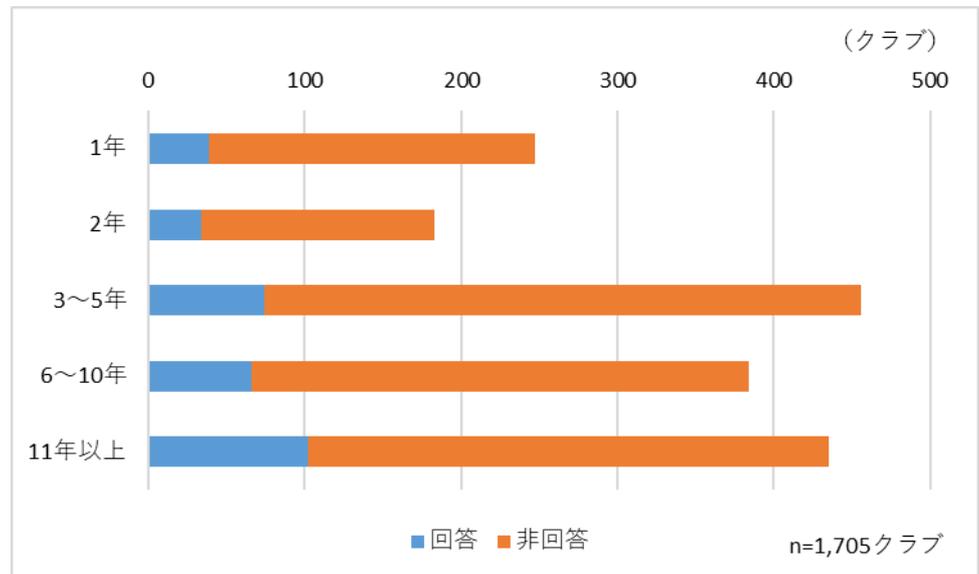


# 活動年数と子どもの成長（1）

- 右の図は、アンケートに回答をいただいたクラブの活動年数別の割合を表します。
- **2021**年度に初めて登録したクラブから**25**年以上継続しているクラブまでご回答をいただきました。

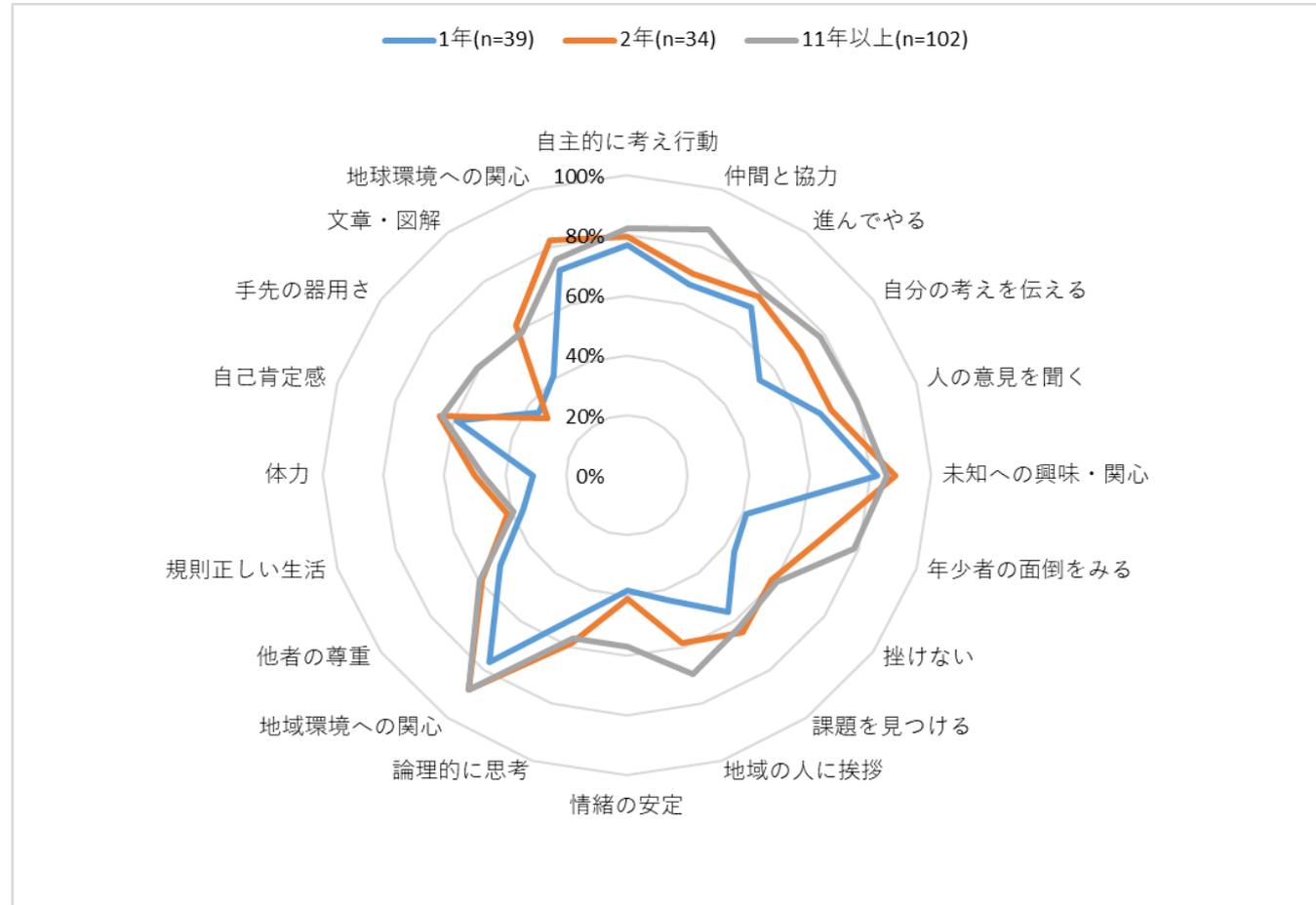


- 右の図は、こどもエコクラブ全国事務局が管理するデータベースを基にして**2022**年**3**月末時点で登録があった**1,705**のこどもエコクラブを年数別に表したものです。
- **3**年以上活動を続けているクラブの数が多くなることがわかります。
- アンケートにご回答いただいたクラブ数を青く色づけしました。
- **11**年以上活動を続けているクラブの回答率が高くなっています。



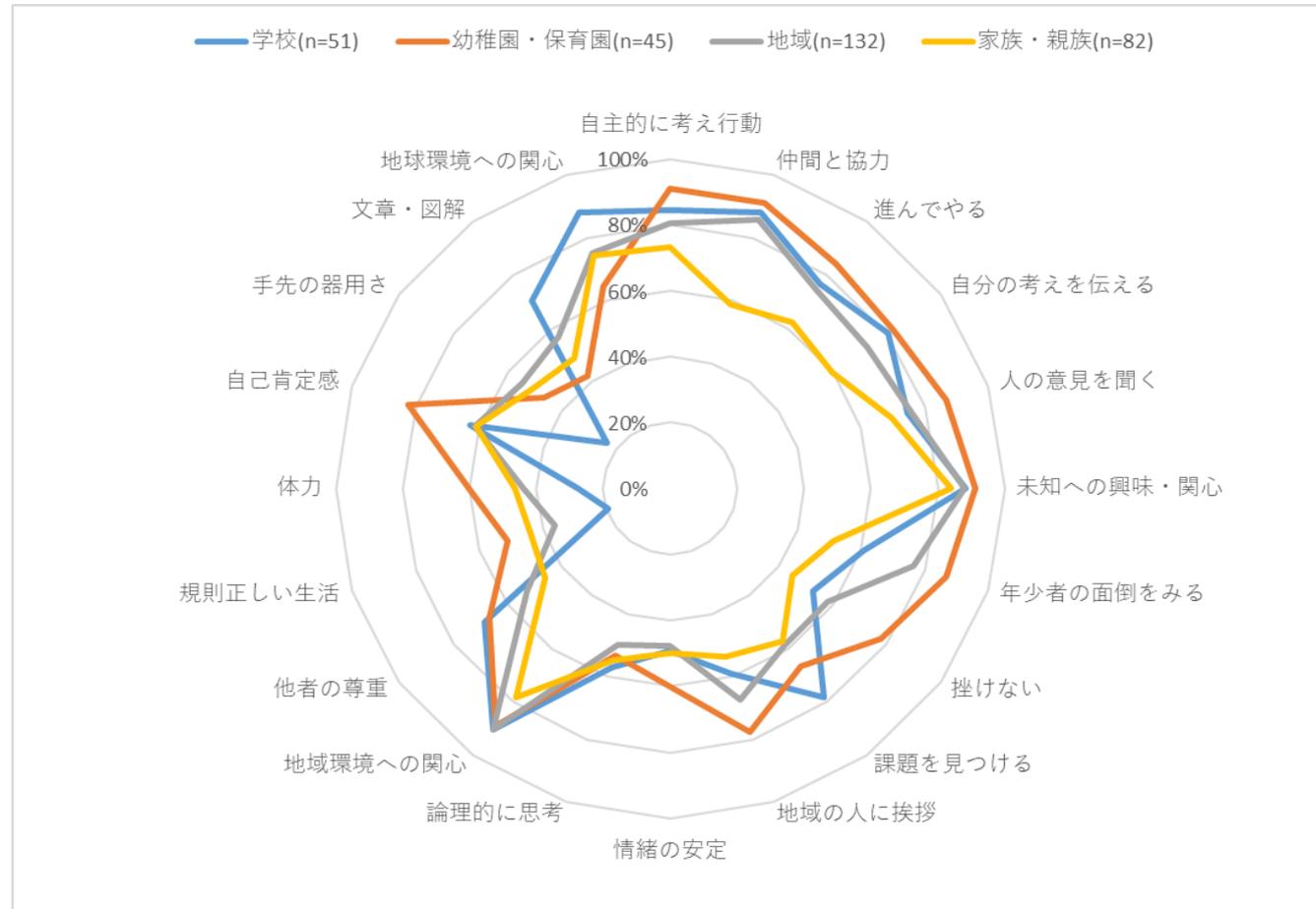
## 活動年数と子どもの成長（2）

- 右の図は、活動年数別に子どもの成長について肯定的な回答（「強くそう思う」「そう思う」）をしたクラブの割合を表したものです。
- 長く活動するほど成長を実感する項目が多くなります。特に「仲間と協力」「年少者の面倒をみる」「自分の考えを伝える」「人の意見を聞く」などは、長期の活動によって身につくものと思われる。
- 継続2年目であっても「未知への興味・関心」「地域環境への関心」「地球環境への関心」を感じるクラブがたくさんあります。サポーターの方々が子どもたちの好奇心を大切にしていることがよくわかります。



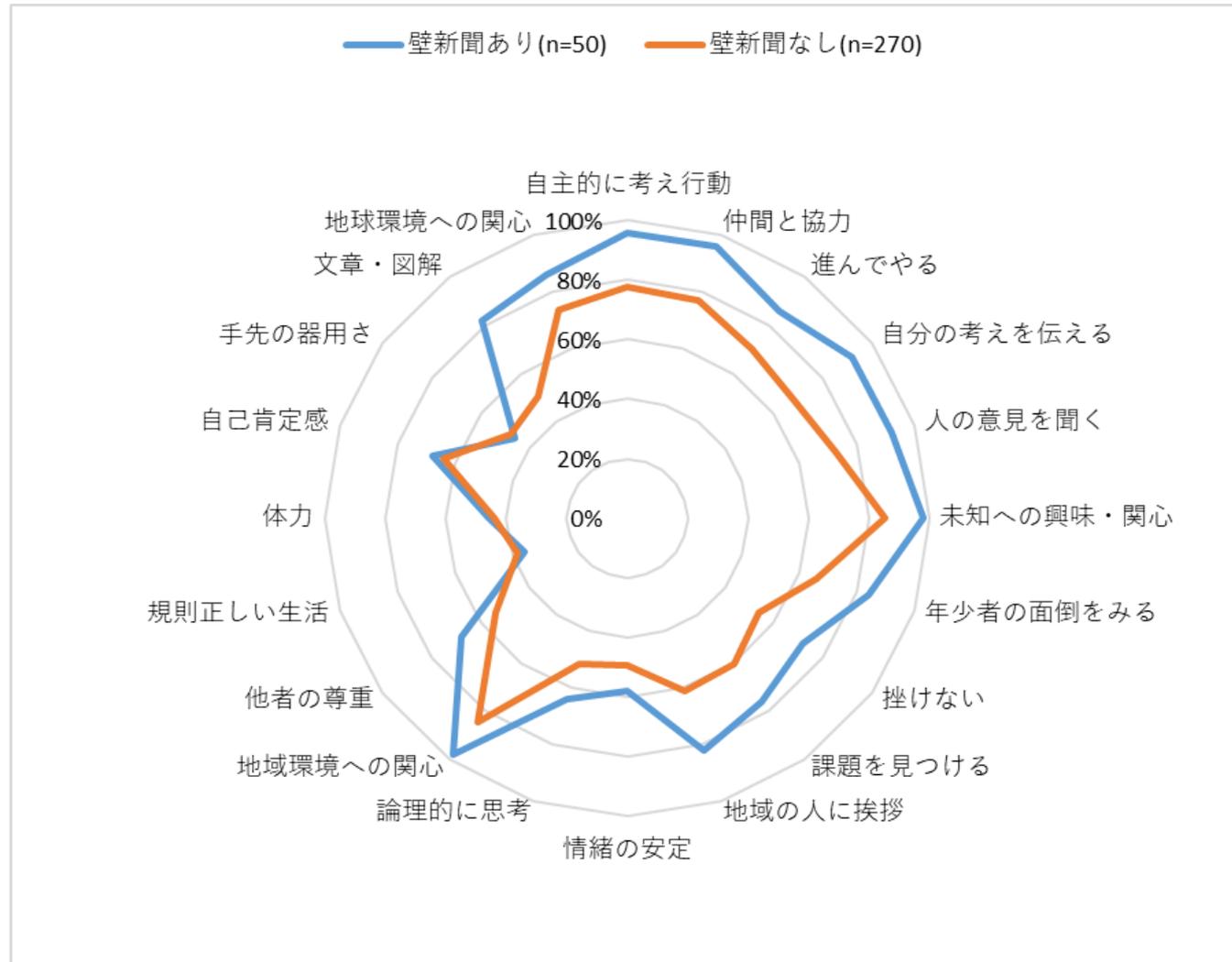
# クラブの形態と子どもの成長

- 右の図は、クラブの形態別に子どもの成長について肯定的な回答（「強く思う」「そう思う」）をしたクラブの割合を表したものです。
- 幼稚園・保育園のクラブが多くの項目で高い割合を示していますが、特にコミュニケーションや精神的な部分での成長を感じる人が多いようです。
- 家族のクラブでは常に生活を共にしているため、他のクラブに比べると子どもの成長を実感しにくいのかもしれません。



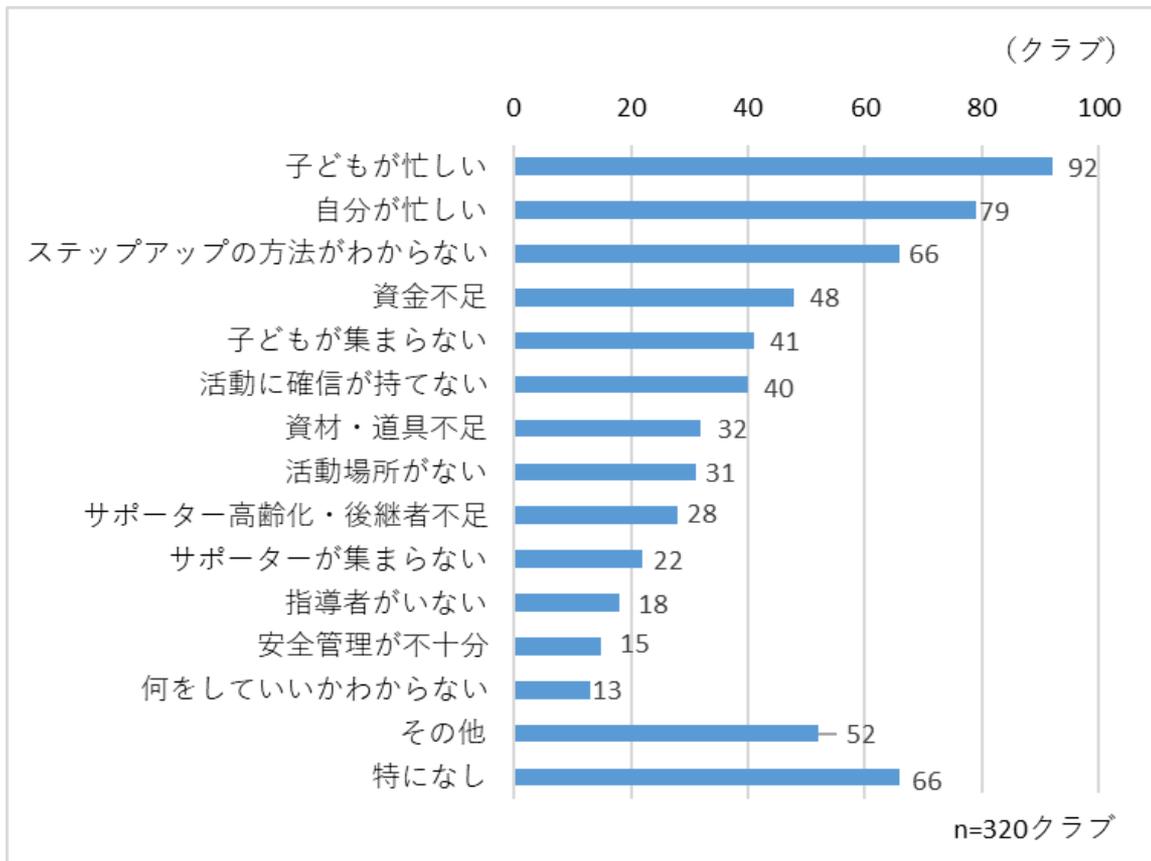
# 壁新聞と子どもの成長

- 右の図は、壁新聞を制作したクラブと制作しなかったクラブを比較し、子どもの成長について肯定的な回答（「強くそう思う」「そう思う」）をしたクラブの割合を表したものです。
- ほぼ全ての項目において壁新聞を制作したクラブが子どもの成長をより感じています。
- 特に「文章・図解」「未知への興味・関心」「自分の考えを伝える」などの項目で大きな差があります。
- 壁新聞制作には労力がかかりますが、この結果からも子どもの成長を促す良いツールであることが明らかです。壁新聞を作るクラブを増やす努力を今後も継続して参ります。



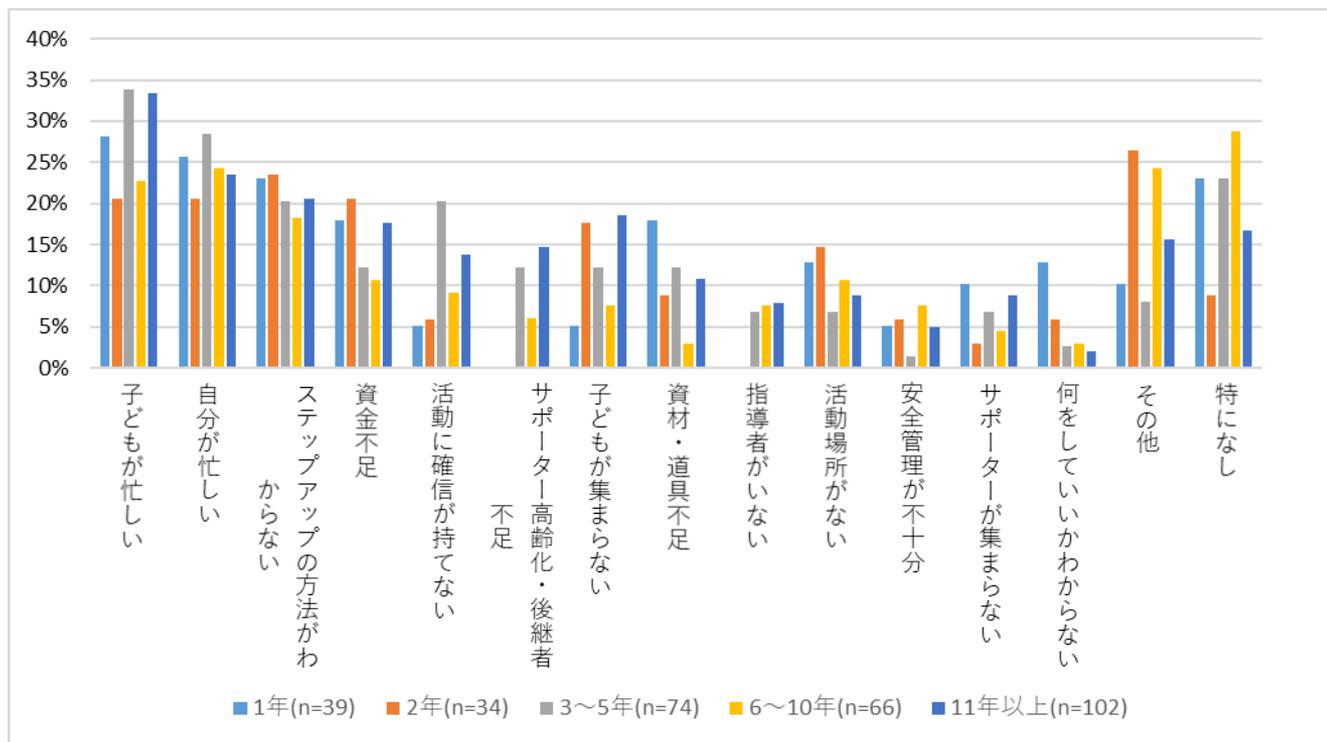
## サポーターの悩み（1）

- 右の図は、サポーターが課題と感じていることを複数回答で答えていただいた結果を表したものです。
- 子どももサポーターも忙しくなっているとの回答がたくさんありました。「子どもが集まらない」、「サポーターが集まらない」も忙しくなっていることが一因ではないでしょうか。
- 子どもの成長を促す方法がそれに続きます。ステップアップについては、壁新聞づくりが有効であることが裏付けられました。壁新聞づくりを通じて一年の活動をふりかえり、学んだことを仲間と共有するとともに、次年度の活動に活かすPDCAがクラブに定着するよう努めて参ります。
- その他としては、コロナ禍で集まらない、活動できないという声が多かったほか、子どもの低年齢化への対応も複数のクラブから挙げられました。



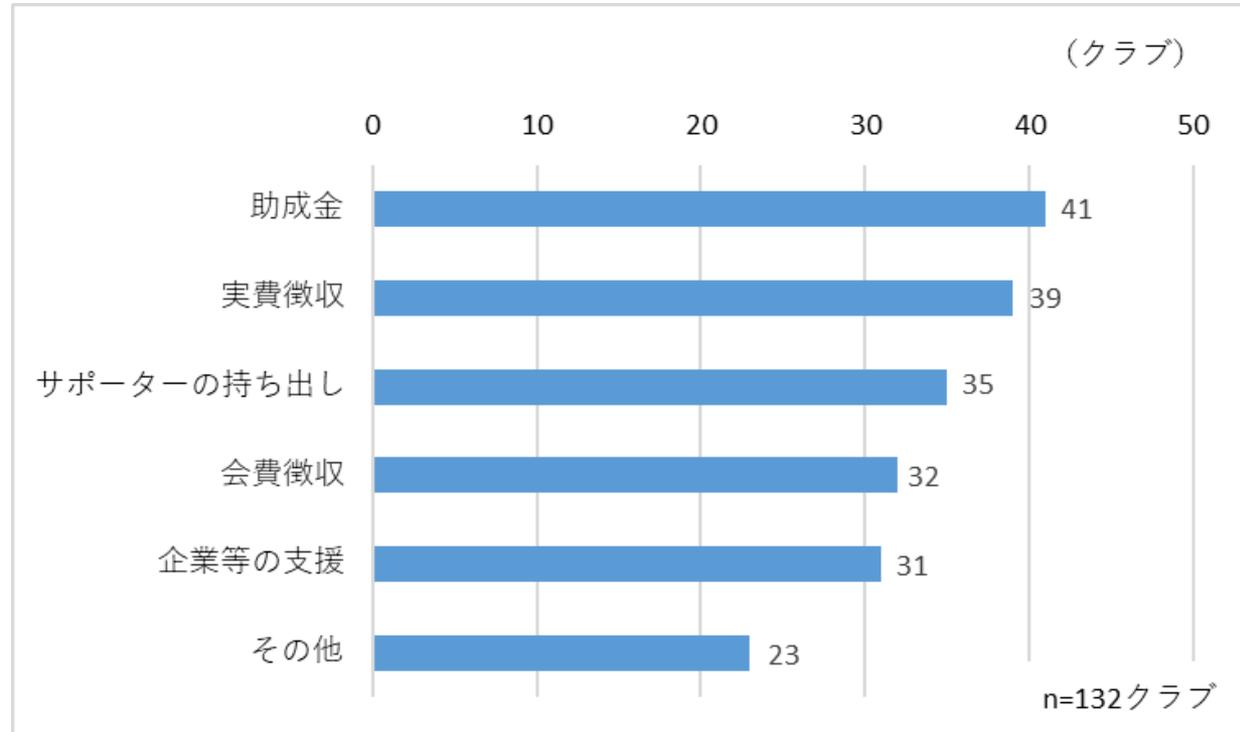
## サポーターの悩み（2）

- 右の図は、各項目を課題と感じているサポーターの割合を継続年数別に算出したものです。
- 活動を始めたばかり（1～2年）のクラブでは何をしたいかわからない、活動場所や資材・道具不足などの悩みが目立ちます。
- 一方、11年以上のクラブでは、子どもの多忙、サポーターの後継者や指導者の不足などを課題と感じている方が多くいらっしゃいます。
- 全国事務局では活動の継続年数に応じたきめ細かなサポートを強化します。



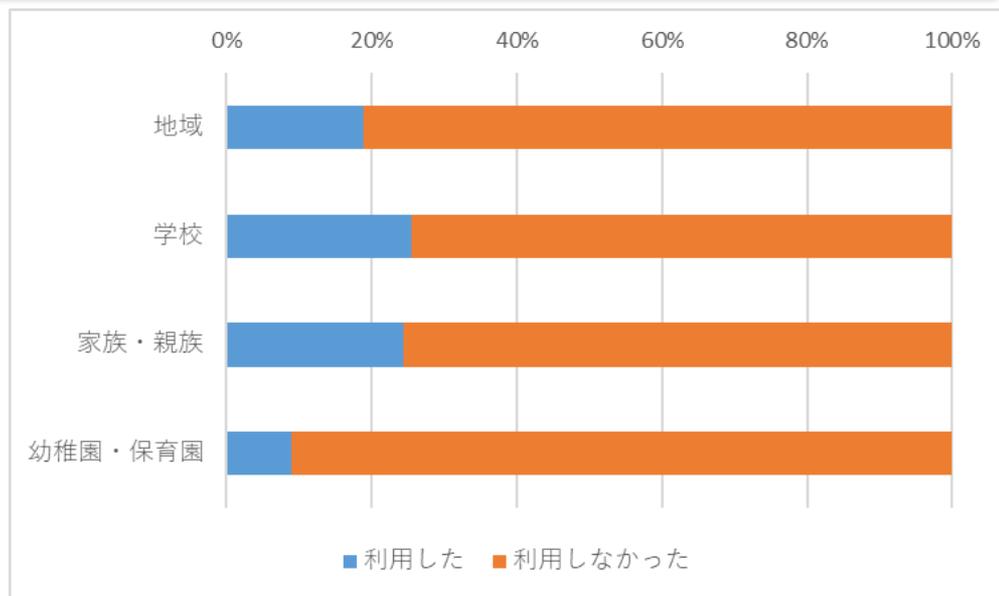
# 活動資金源

- 右の図は、「地域クラブ」が活動資金をどのように得ているかを回答していただいたものです。
- 各クラブが工夫して様々な資金源を用いていることがわかりますが、クラブの活動を持続可能にしていくためにはサポーターによる持ち出しを少なくしていく必要があります。
- 「その他」の回答では「園や学校、自治体の予算の枠内で対応している」、「親団体からの支援」などのほか、「お金がかからないよう工夫している」という声もありました。

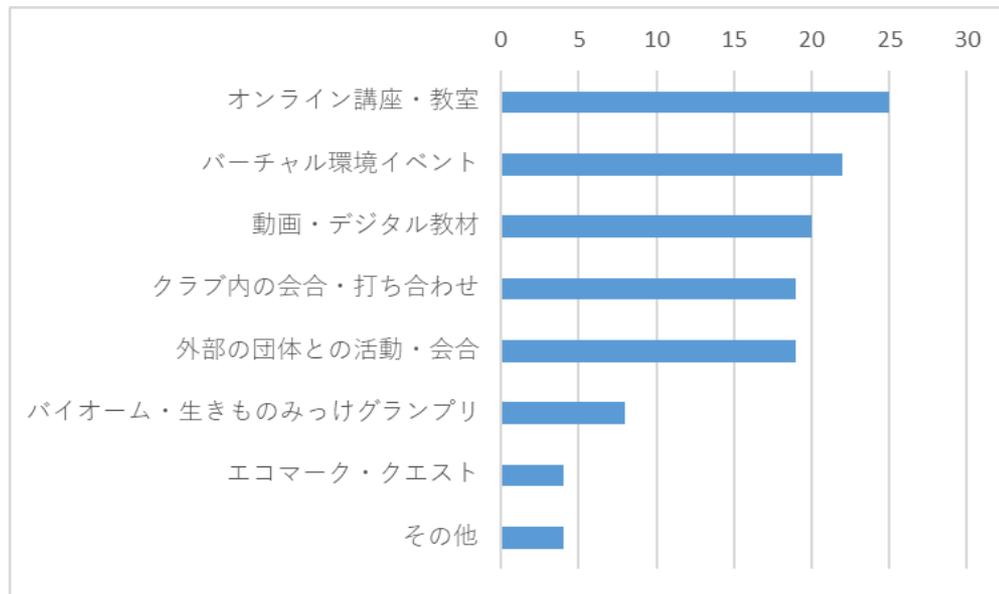


# オンライン・デジタルの活用（1）

- 右の図は、長期化するコロナ下でオンライン会議システムやデジタル教材・プログラムを利用したことがあるクラブの割合を示したものです。設備が整っており、子どもたちが集まれる場がある学校や、自宅から参加できる家族のクラブで比較的高くなっています。

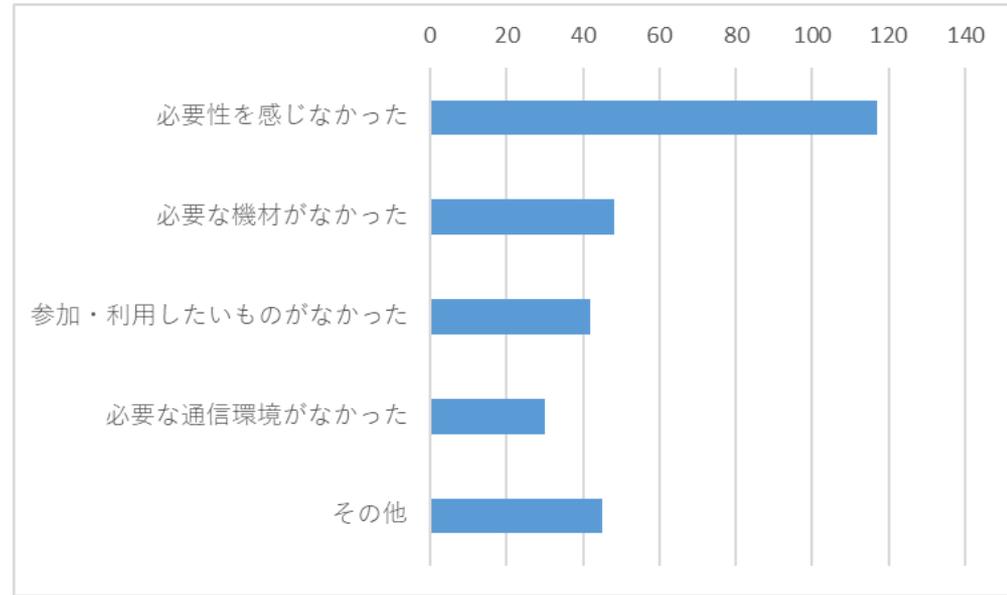


- 「利用したことがある」と回答したクラブにどのようなものを利用したかきいたところ、右の図のような回答を得ました。
- 講師の話聞く、コンテンツを視聴するなどの受動的な利用が中心ですが、双方向のコミュニケーションも実践されるようになってきています。



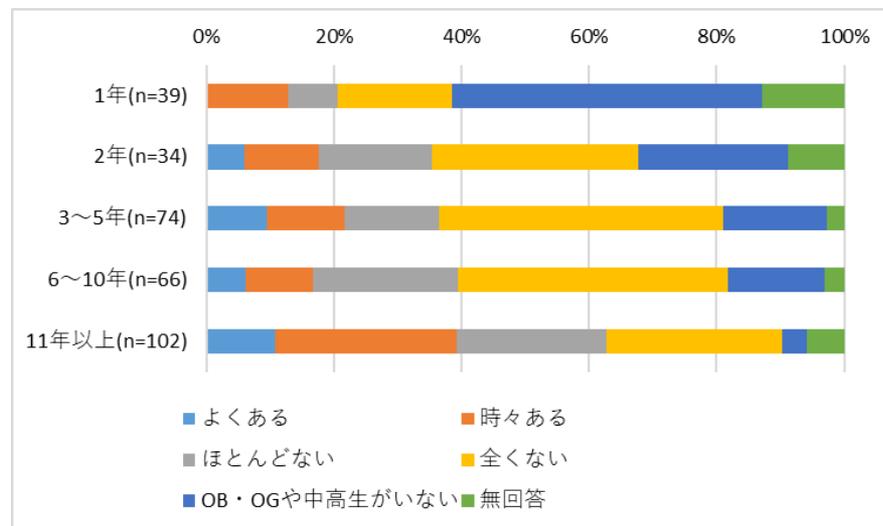
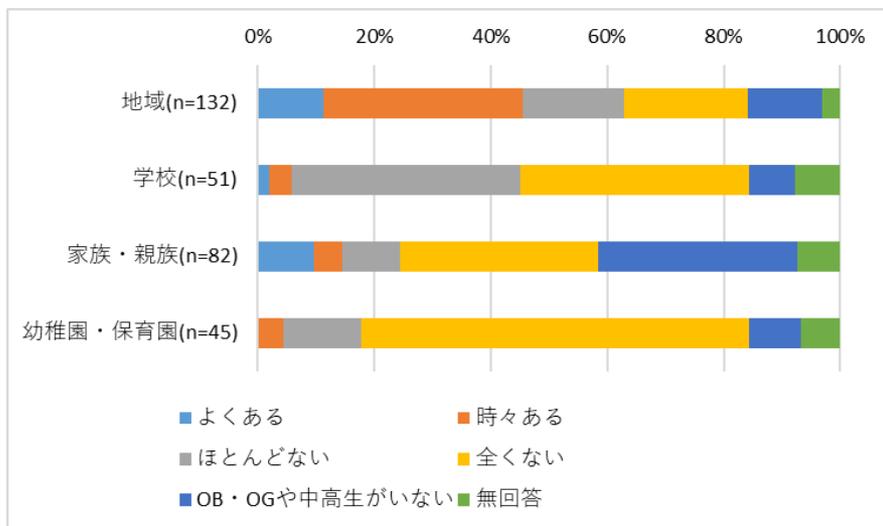
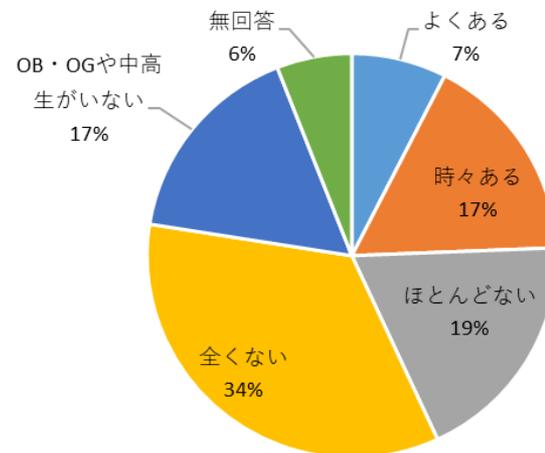
## オンライン・デジタルの活用（2）

- オンライン・デジタルを活用しなかったクラブにその理由をきいたところ、右の図のようになりました。
- 多くのサポーターがその必要性を感じていないようです。直接的な体験を重視し、可能な限りそうさせたいと考えていることがわかります。
- 学校教育でもデジタル技術の活用は進んでおり、コロナが収束してもこの流れが変わることはないと思われます。直接体験を大事にしつつ、遠距離での交流が可能となることなど、オンラインならではの利点を活かせるような活動を全国事務局からも提案してまいります。



# 中高生メンバー、OB・OGによる活動支援

- 中高生メンバーやOB・OGが、活動の企画・運営や小学生メンバーの引率などのサポートをすることがあるか尋ねたところ、右の図のような結果となりました。クラブの形態別、活動年数別にみたものが下の図です。
- 異年齢のグループで活動する地域のクラブで、活動年数が長くなるほどユースがサポートする割合が高くなっています。



## サポーターが保有する資格

- サポーターが保有する、教育や環境学習・体験活動等に関連する資格について聞き、クラブ形態別に集計したところ右の図のようになりました。
- 学校のクラブで教員免許を持つサポーターが、幼稚園・保育園のクラブで保育士・幼稚園教員の資格を持つサポーターが多いのは当然として、地域クラブでもこれらの資格を保有するサポーターが多くいらっしゃいます。こどもエコクラブが、教員や保育士が現役を退いた後の地域での活躍の場として機能していることが伺えます。
- 一方で環境全般や環境教育系の資格を有しているサポーターはまだ少数にとどまっています。資格を有する人たちは大勢いるはずなので、彼らの実践・活躍の機会としてこどもエコクラブを立ち上げてもらうことも、クラブ・メンバー数を増やしていくうえで効果的と考えられます。

